Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-30

スマトラ沖大地震・津波災害に対する医学系分野からの復興支援活動 : 環境保健に関する災害マネジメントシステムのシンポジウム : インドネシア現地報告

柳沢, 振一郎
鎌江, 伊三夫

(Citation)
神戸大学都市安全研究センター研究報告,9:165-168

(Issue Date)
2005-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/00422530

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00422530

KOBE UNIVERSITY

神戸大学都市安全研究センター
研究報告，第9号，平成17年3月

スマトラ沖大地震・津波災害に対する医学系分野からの復興支援活動
—環境保健に関する災害マネジメントシステムのシンポジウム：インドネシア現地報告—

Assisting Rehabilitation in Medical Aspect for the Earthquake and Tsunami Disaster in Sumatra
— Report form Symposium on Disaster Management System Related to Health and Enviroment Aspect in Indonesia —

柳沢　振一郎[1)]
Shinichro Yanagisawa
鎌江　伊三夫[2)]
Isao Kamae

概要：スマトラ沖大地震に対し、神戸大学は都市安全研究センターをはじめ、医学系研究科、医学部付属医学医療国際交流センター、工学部、自然科学研究科、国際協力研究科が参加する3年間の総合プロジェクトによる復旧・復興調査に関する総合研究への取り組みをスタートした。医学系分野としての対応は、初年度として、インドネシアに災害医療救援・調査団の派遣、災害メンタルヘルスに関する国際シンポ開催等の活動を行った。これらの活動の中で、現地から震災に関する教育支援を要請され、その一環として、Gadjah Mada 大学と共同で震災シンポジウムを開催するに至った。同シンポジウムは学生を対象として企画され、そこでの講演を通して多くの学生と津波対策、地震監視網、疫学情報システム等に関する議論を行った。参加した学生達は、日本での取り組みについて知ろうとする意欲にあふれており、本シンポジウムは現状と今後のニーズを知るうえで有意義であった。今後はさらに、医療従事者へのレベルアップのための教育、心のケアなどの支援要請が求められている。しかし、現地での支援に対する期待量は、我々大学関係者の実現可能量を大きく上回っていると認識された。したがって、本報告では、現地のニーズに対してどのような支援ができるのか、その現状の展望を明らかにし慎重な議論を重ねた上で復興支援の資源投入を行うことが必要であることを総括した。

キーワード：スマトラ沖大地震、復旧・復興調査、教育活動支援

1．はじめに

2004年12月26日にスマトラ沖大地震が発生し、それに伴い発生した大規模な津波は、震源地近隣の国々に甚大な被害を及ぼした。神戸大学としての支援活動への対応は、翌月の1月5日の都市安全研究センターからの復旧・復興調査に関する総合研究の提案からはじまった。同提案は、都市安全研究センターをはじめとし、医学系研究科、医学部付属医学医療国際交流センター、工学部、自然科学研究科、国際協力研究科が参加する3年間の総合プロジェクトとして構成されており、それぞれの研究分野で具体的な活動について早急に検討がなされた。

医学系分野の対応は1月14日に第1回の検討会が開催され、今後の支援活動についての議論がなされ、その初動としてインドネシアへの災害医療救援・調査団の派遣が決定した。同時に、医学系分野の支援活動として地域の人々への教育活動への支援についても検討がなされた。

本稿では、教育活動の一環として、インドネシアのGadjah Mada 大学と神戸大学医学部との共同開催として企画したシンポジウム“Disaster Management System Related to Health and Enviroment Aspect in Indonesia”に共同主催者として参加したので、その報告を行う。また、同シンポジウム開催までのスマトラ沖大地震・津波災害に対する医学系

分野の取り組みについての概要も報告する。

2．医学系分野のこれまでの復興支援活動概要

スマトラ沖大地震・津波災害に対する医療救援・調査は、スマトラ島のバンダアチェ東方の町シグリを中心に、第2次団まで派遣されている。以前より、医学部はインドネシアのIndonesia大学、Airlangga大学、Gadjah Mada大学との交流があったことから、そのなかのAirlangga大学との合同医療救援・調査団として、現地では支援活動および調査を行ってきた。

第1次派遣団としては、医師・看護師・薬剤師から構成される7名が派遣され、医療救援・調査を1月23日から31日の日程で行い、帰国後2月3日に、その報告会を開催している。その報告では、現場では既に急性期は終了し、復興期へ移行する途上であり、現地医療スタッフの不足、技量の低さ等が問題であることが明らかとされ、さらに、今後は心のケアをはじめとし、医療レベル向上のための教育や防災教育等の長期的な支援が必要であるとの報告がなされた(表1)。

震災からすでに1ヶ月が経過し、急性期から回復期にさしかかり、被災地域からは、心のケア、すなわち災害メンタル・ヘルスが要求されてきた。これを受け、2月27日には、神戸大学（医学部、都市安全研究センター、国際協力研究科）の主催で“災害犠牲者の社会心理的な衝撃の減少に関する国際シンポジウム”が神戸大学医学系研究科で開催された。このシンポジウムは津波犠牲者の社会心理的な衝撃の研究、災害メンタル・ヘルスの見直し等を目的としている。欧米を含め、世界より30人以上の第一級の国際的研究者の参加があり、Airlangga大学からの参加者からは、被災後の現状および今後の課題等の特別報告がなされた。神戸大学に対しては、継続的なメンタル・ヘルスのサポート要請がなされた。

Airlangga大学の要請に応え、第2次派遣団は、医師・薬剤師から3名から構成され、難民キャンプを中心に医療救援調査を3月11日から20日の日程で行ってきた。その報告は3月29日に行われ、メンタルヘルス、救急医療技術、看護等に関する短期セミナー要望とその必要性についての報告がなされてた。次年度以降、それら要望についての検討を重ね対応していく予定とされた。

表1．第1次医療救援・調査団による現状と今後の課題一覧

現状	今後の課題
・医師、看護師、医療物資等は不足している	・医療物資の援助
・すでに、医療に関しては特に混乱した状況ではない	・生活基盤の確立
・看護レベルが低い	・医療レベルを高めるための教育支援（特に救急医学）
・薬剤の管理、適正使用には課題が多い	・薬剤管理・使用適正化の推進への援助
・精神科医が大きく不足している	・精神科医の派遣
・感染症対策が必要	・公衆衛生に関する教育支援
など	など

3．環境保健に関する災害マネジメントシステムのシンポジウム：インドネシア現地報告

第1次派遣団からも報告がなされているが、医療レベル向上のための教育や防災教育等に対する支援の要望は高い。本会は、Gadjah Mada大学からの要請により、共同で企画したシンポジウムである。会の冒頭には学長からの挨拶もあり、教育支援に対する大きな期待感が認められた。参加対象者は医学部医学科・看護学科学生、医学系研究科学生が中心であったが、医学部長、看護学科長をはじめとした多くの研究者が出席しており、パネルディスカッションでは活発な議論がなされた。しかしながら、著者の発表以外はすべてインドネシア語で行われたため、内容の詳細についての把握が困難であり、現地語へのサポート態勢への必要性が痛感された。

シンポジウムは3セッションとなっており、著者はセッション1の第一演者として“The Need for Health Risk Communication— Lessons learned from the Great Hanshin-Awaji Earthquake”と題し講演を行った。その他、同セッションでは、災害のリスクマネジメント、災害後の子供に対する心のケア等の発表がなされた。その後のパネルディスカッションでは、日本におけるコミュニティーネットワーク、介護保険、津波対策、地震監視網など、多くの質問が学生らから出され、日本での取り組みについて知ろうとする意欲にあふれていた。また、大学の研究者からは、公衆衛

生の視点から疫学情報システムに関する質問がなされ、それについての議論もなされた。なお、著者からフロアーの学生への回答は、すべてインドネシア語への通訳が行われた。

セッション2では津波の被害が甚大であったAcehで実際に救援に携わった医師による現地の状況説明や直面した問題点の報告がなされ、ここでも活発な議論がされた。セッション3では看護の立場から震災に関する対応について報告がなされて、医学系シンポジウムとしては充実した内容構成であった。

シンポジウムは上述のごとく、インドネシア語で進行されたが、これは参加者への教育的側面からは非常に有益であったと思われる。本シンポジウムの参加者の中心は、看護学科の学生であり、必ずしも英語が得意であるわけではない。震災での多くの知識を短期に吸収するのに、言葉の壁は大きな妨げになることは明らかである。今後の支援要請に対するシンポジウムやセミナーを開催する場合にも、講習者の立場での開催が重要となると結論された。

4．おわりに

スマトラ沖大地震は周辺各国に大きな被害をもたらした。神戸大学には、阪神・淡路大震災の被災地にあった大学として復興に対する支援への期待が大きい。医療に関しては、被災後およそ1ヶ月で急性期から回復期へ推移し、医療そのものから、医療従事者へのレベルアップのための教育、心のケアなどへと支援要請事項が変化してきている。具体的には、研究者間での教育プログラムの開発や、精神科医のトレーニングなどが挙げられよう。しかし、現地での支援に対する期待量は、我々の実現可能量を大きく上回っているように認められる。したがって、現地のニーズに対して、どのような支援ができるのか、慎重な議論を重ねた上で復興支援の資源投入を行うこと、さらにその成果をいかに評価するかが、今後は必要であると総括される。

筆者：
1）栁沢振一郎、都市安全研究センター、助手；2）鎌江伊三夫、都市安全研究センター、教授

SYMPOSIUM DISASTER MANAGEMENT SYSTEM RELATED TO HEALTH AND ENVIRONMENT ASPECT IN INDONESIA
18 Maret 2005
Auditorium II FK UGM

SUSUNAN ACARA

07.30 - 08.00	Registrasi
08.00 - 08.30	Sambutan 1. Ketua Panitia : Dr. Sunarto, MS 2. Shinichirou Yanasigawa, MCS 3. Wakil Rektor Senior bidang Administrasi : Prof Marwan Asri MBA --> Pembukaan
08.30 - 09.30	Disaster Management System : Dr Ahmad Sujudi, Sp.B, MHA
09.30 - 09.45	Coffee break
09.45 - 11.30	SESSION I - The need for health Risk Communication : Lesson Learned from The Great Hamshin Awaji Earthquake : Shinichirou Yanasigawa, MCS - Disaster Management : Prof Dr Sutikno & Prof. Dr. dr. Adi Heru S, M.Com, M.Nut - The Psychological Reactions of Children following a Disaster : Rahmat Hidayat, S.Psi, MSc
11.30 - 13.30	Lunch Break
13.30 - 15.00	SESSION II - Evaluation of Rehabilitation and Reconstruction Program of Post Tsunami Disaster in Aceh amd North Sumatra : BAKORNAS PBP - Experiences and Problems of PMI in coping of Tsunami Disaster in Aceh and North Sumatra : PMI Pusat - Relief and Aids Management of Tsunami Disaster in Aceh and North Sumatra (administration and Distribution Promblems) : Department Sosial RI
15.00 - 15.15	Coffee Break
15.15 - 16.45	SESSION III - Peranan Brigade Siaga Bencana : Dr. Hendro Wartatmo, Sp.B - Peranan tim bantuan kesehatan UGM untuk Aceh : Prof. Dr Hari Kusnanto, MPH, Ph.D
16.45 - 17.00	Penutupan : Dekan Fakultas Kedokteran UGM

Assisting Rehabilitation in Medical Aspect for the Earthquake and Tsunami Disaster in Sumatra

— Report form Symposium on Disastre Management System Related to Health and Enviroment Aspect in Indonesia —

Shinichro Yanagisawa
Isao Kamae

Abstract

Kobe University established comprehensive research project in three years to assist relief and rehabilitation for the Tsunami disaster in Sumatra, Indonasia. Responding to the initiation of the project, Kobe University School of Medicine, collaborating with Airlangga University, dispatched the primary and secondary medical teams to Sigli in Sumatra on Jan 23-31 and March 11-20, 2005, respectively. Also it held an international symposium om mental health in disaster on Feb 27, inviting distinguished researchers from all over the world including Indonasia. Furthermore, according to the request from Gadjah Mada University, an educational symposium was held in Yogyakarta on March 18, collaborating with Kobe University. The key issues identified at the meeting included preparedness for tsunami, monitoring networks, epidemiological information systems, education for improving skills, mental health care and so on.

The demand in the community, however, seemed to be more than we can provide. Accordingly, it was suggested that careful evaluation to fill the gap must be performed for future assistance and collaboration.